

# 秋成遺文

## 目次

神代がたり	一
史論 その一	三一
史論 その二	六二
ぬば玉の巻	九五
七十二候	一二四
追擬花月令	一七五
淺間の煙	一九〇
ついでら文	二〇二
麻知文	二二二
異本膽大小心録	二四五
自傳	二五五

岩橋の記	二六三
山霧記	二八七
花蟲合	三一五
十五番歌合	三二一
海道狂歌合	三三五
山裏	三四五
迦具都遅能阿良毗	三六三
箕面行	三六八
北野加茂に詣づる記	三七二
伏見行	三八〇
藪姑射山	三八二
再詣姑射山	三八四
初瀬詣	三八八
曉時雨	三九〇

背振翁傳	三九五
駕央行	四〇〇
ますらを物語	四〇六
鶉の屋	四一八
寛政改元	四二五
うかれ鴉	四二九
田父辭	四三一
雛祭詞	四三二
夏山里に遊ぶ	四三三
納涼詞	四三五
初秋の夜を玩ぶ	四三六
初がりの詞	四三八
十六日朝雨大文字を思ふ	四三九
雪の詞	四四一

文化元年朔雨雪遙思故國歌	四四二
八月下旬歸京後遙雨連日復思故國歌	四四三
淨光精舎にてよめる	四四五
瑞龍山下に庵すみの時雪の日獨言に	四四九
山村除夜	四五〇
山村元旦	四五一
多福言	四五二
近頃題詠の歌ども	四五三
名節贊	四五五
茶の歌	四五七
天保歌	四五六
同解	四六三
俳句	四六九
豊太閤を祭る	四七五

哭梅厓子	四七七
安樂寺上人傳	四八〇
遠藤氏假山記	四八二
幽石軒記	四八三
仰觀俯察室記	四八五
吞湖堂記	四八七
富士山說	四九一
讀日本春秋	四九二
代太武禪祝壽畫說	四九三
與上田耕夫畫山水說	四九三
皇太子厩戶論	四九四
皇太子大友論	四九五
菅相公論	四九七
大明國師畫像記	四九七

自像筥記	四九八
賜攝津國西成郡今宮庄弘安之勅書并代々之御牒文序	四九九
介中拙齋國手追悼之序	五〇六
雨夜物語たみことば序	五〇七
九嶷子五體千文之序	五〇九
井華集序	五一五
奇鈔百圓跋	五一七
古今和歌集打聽附言	五二〇
古今和歌集打聽序末識語	五二七
土佐日記解序	五三二
土佐日記解識語	五三七
再版文布序	五三八
縣居歌集序	五四〇
靜屋歌集序	五四三

伊勢物語古意序	五四四
よしやあしや序	五四六
懷風藻跋	五五二
萬葉集見安補正序	五五三
春葉集序	五五五
東丸の書ける古今和歌集序の後に	五五八
夏野の露識語	五六〇
落窪物語序	五六〇
校本大和物語奥書	五六四
古筆名葉集序	五六五
契沖阿闍梨遺文書後	五六五
河づらの宿	五六七
壁書	五七〇
晝隠松年にあたふ	五七〇

尾張人大館高門へ答ふ	五七二
吳春へ	五七七
かきね漬のこと葉	五七九
吳春へ	五八一
吳春へ	五八三
吳春へ	五八五
松本重政へ	五八九
吳春へ	五九〇
無名氏へ	五九一
百鍊へ	五九二
眞乘院へ	五九三
無名氏へ	五九四
大田南畝へ	五九五



追加

檜の柚	五九七
秋風篇	六二五
西歸記書後	六二六
讀環中師題于虎溪三咲圖	六二七
齋宮へ	六二八
羽倉氏へ	六二九
紫曉へ	六二九
實法院主へ	六三一

目次終

目次